

御憐れみを速やかに差し向けてください

まず、詩編79編を祈りつつ、また心に留まる箇所を書き留める筆記具を持って読んでみよう。詩編朗読と讚美歌の歌唱、祈りを組み合わせることも素晴らしいことでしょう。

79編は74編に似て、耐えがたい困難に直面しての「神の民」の祈りです。79編を読んで心に留まることは、「異国の民」と神の僕であり羊飼に養われる「神の民」との対比です。この詩は「わたしたち」と「彼ら」と「あなた」（神）への言及で構成されています。この歌の歴史的背景は紀元前587年のバビロニアによるエルサレム陥落でしょうか？異国の民への神の審判を願う想いは、では、イスラエル自らに対する神の審判はどうかという問いを引き出します。そこで、詩人は「どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めず/御憐れみを速やかに差し向けてください」と哀願するのです。この詩は「悪」（変節の罪）の告白を含む歌です。今日の信仰者たちはこの叫びに自らを重ね合わせることでしよう。「わたしたちは弱り果てています。」と訴えています。

1. 「異国の民」と神の民イスラエル

「異国の民」（1節、6節、10節、単に「諸国民」、口語訳は「異邦人」）は4節では「近隣の民」（4節、12節は単に「われわれの隣人たち」）「周囲の民」（4節）と言い換えられ、彼ら彼女らは「あなたを知ろうとしない」民、あなたの御名を呼び求めない」民と呼ばれ、イスラエルの嗣業の地を襲い、エルサレム神殿を汚し、残虐な殺傷、殺戮を行った人々であると言います。

彼ら彼女らに対して、イスラエルの民は「あなたの僕ら」（2節、10節）「あなたの慈しみに生きた人々」（2節）そして、「あなたの民」「あなたに養われる羊の群れ」（13節）と呼ばれています。新共同訳の翻訳者自身にこのような対立図式で考える傾向があるのかも知れないです。それを前提にして、この対比を心に留め、自分はどちらに立っているかを黙想してみましょう。

2. 「主よ、いつまでですか」、「彼らの神はどこにいるのですか」

詩編において度々繰り返される「主よ、いつまで続くのですか」が5節に登場し、不条理、理不尽な苦難に直面する信仰者の呻きが主に向かってなされます。「いつまで」「どこにおられるか」は暴力や貧富の差や葛藤に直面する信仰者には、まさに、切迫した祈りでしょう。ここでは、「異国の民」が「彼らの神はどこにいる」と侮るのですが、…。

3. 神の慈しみ、憐れみを求める祈り（8節）

「異国の民」と「信仰の民」の比較は、では、あなたはどうかのか？という問いの前に信仰者を立たせます。そこで、8節では、「どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めなさい」という祈願に導きます。「今の」悪ではなく、「昔の悪」なのでしょうか？まあ、今、自覚的に悪を行っている状態であれば、祈ることは難しいでしょう。昔の悪にみ心を留めるのではなく、「御憐れみを速やかに差し向けてください。わたしたちは弱り果てています（低くされている）。」は心を打つ祈願ですね。

預言者エゼキエルの書（36:16-38）で目にし、耳にする「御名のために」が9節に登場します。神が異国の民に報復されること、イスラエルの民の義に報いることではない、つまり、人間的な「ために」ではなく、神ご自身がご自分の「御名の栄光のために」に行動され、その結果、イスラエルを助け、救い出し、罪を赦して下さるようにと願っています。なんと心強いことでしょう。神ご自身がご自身のために行為されるのです。私たちが神を弁護することなど無用です。

4. 異国の民への審判の願いとイスラエルの救済の祈願、そして、神への感謝と宣べ伝えの使命

詩の最後は、信仰告白:「わたしたちはあなたの民/あなたに養われる羊の群れ」で終わり、感謝が神に捧げられ、神の栄誉を語り継ぐ使命が確認されています。

私たちも、かくありたいものです。